

織田信長文書の研究 上巻

史料」が永祿末・元亀初の数年にとどまり、しかも彼の活動が諸國にまたがるため、その資料の蒐集に研究者はぜひ分と苦勞させられているのではないかと察せられる。かかる学界の現状を前に、まことに時宜を得て、本書が上梓せられた。

大史料編纂所の影写本による部分が多い。その文書を、信長の全生涯にわたって蒐集すること自体、極めて大事業であることはいうまでもないが、本書は、書名の示す通り、詳細な研究が附されているのである。序説として「織田氏の先祖と信長」を述べ、各年について解題的にコメントを付し、年月日不明の文書については、書判・印判・内容等によって発給年月日を推定する、という通常の研究の他、本書は、各文書に読み下し文をつけ（紫制等読みの明白なもの是一部省略）、さらに詳しく解説研究が附され、参考文書が同形式で引用されているのである。このことは、容易な業ではないことは、論文を書いた程の者なら、誰しも痛感されるであらう。一例をあげれば、天文廿一年十二月廿日付、尾張加藤全綱、同紀左衛門尉宛判物のうち、「質物の義、（蔵）為盗物、蔵之不可成失墜、本利遂算用、可為諸之、於蔵失質事、如大法本錢以一倍可相果候」という件は、「質物の義、盗物たりと雖も蔵の失墜となすべからず、……蔵に於て失質の事は、大法の如く、本錢の一倍を以て相果すべく候」と読み下し、蔵（質屋）と解説されている（二六・七八頁）。

137 (461)

と比定された正月十五日付黒印状の宛先伯左馬進は左京亮の子か、とされるが、狛氏の由緒書には「左京亮秀綱 亦号左馬進」とあって、この辺も何らかのコメントが必要となろう。

とはいえ、本書の内容に関し、疑問があるとするれば、今後において研究者は本書を対象として修正の意見を提出してゆけばよいわけである。信長文書の規準が本書によって与えられたものというべく、信長政権の研究は画期的に前進することになろう。

本書は、長年史料編纂所にあつて史料の蒐集、復刻に苦勞せられた著者にして、はじめてなし得た業績であるとともに、信長文書に対する著者の執念を感じさせられる研究である。

なお、下巻には天正三年以後の文書の他、花押集・印章集、それに索引が附される由刊行の一日も早からんことを期待したい。

(A5判八〇三頁 昭和四四年三月 吉川弘文館発行 定価四、〇〇〇円) (熱田 公)

学界消息

日本考古学協会 第三五回総会

昭和四四年四月二六・二七日

於 慶応義塾大学

岩宿遺跡の再検討

神奈川県見野遺跡群における関東ローム層と石器文化 芥沢 長介

宮崎県、岩土原遺跡の爪形文土器 杉原 莊介・戸沢 充則

伴出細石器文化と押型文文化 鈴木 重治

群馬県室沢大林Ⅱ遺跡の調査——縄文文化における炉内埋設土器と煮沸機能について—— 組沢 貞順

新潟県青海町寺地攻玉遺跡 寺村 光晴・関 雅之・金子 拓男

所謂石鍾土鍾について 解釈の問題 渡辺 仁

環濠集落の板付遺跡 杉原 莊介

岡山県津島遺跡一九六八年度調査概報 津島遺跡調査団

茨城県殿内遺跡の調査 小林 三郎

弥生時代の巻貝製貝輪について I 縦切貝輪の場合 永井 昌文

前方後円墳の設計型について 們 国男

滋賀県大津市穴太飼込古墳群調査概報 西田 弘・丸山 龍平

群馬県観音山古墳について 大塚 初重・梅沢 重昭・外山 和夫

福島県いわき市中田横穴の調査

渡辺 一雄・松本 友之・馬目 順一

鹿角製刀剣装具の直弧文 伊藤 玄三

昭和四三年度飛鳥京跡の発掘調査 末永 雅雄・網干 善教

平城宮西官衙(馬寮か)の発掘 高島 忠平

昭和四三年度難波宮址発掘調査概報 中尾 芳治

太宰府史跡の発掘調査について 藤井 功・亀井 明徳

出雲国府跡の調査 山本 清・町田 章

岩手県北上市東木八天遺跡調査概報 宮本長二郎・阿部義平・近藤 忠

和賀郡衙址の研究—— 加藤 孝

興福寺・菩提院大御堂の地下遺構調査 樫本 杜人・森 郁夫

瀬戸市昔田古窯址群の調査 杉崎 章・宮石 宗弘

愛知県刈谷市井カ谷古窯群の調査 加藤 岩蔵・斎藤 嘉彦

山形県酒田市東部古窯址の調査 川崎 利夫

滋賀県高島郡の古代製鉄遺跡 森 浩一

岩木山麓大館森山の製鉄址について 桜井 清彦

越前一乗谷朝倉氏館跡発掘調査 河原 純之・八賀 晋・石松 好雄

筑前・武蔵寺経塚の調査 小田富士雄・宮小路賀宏

近世考古学の提唱 中川 成夫・加藤 晋平

上場技法と台形石器への展開 池永 寛治